

強制操作

「ティファ編」

スマホで命令したことが現実に



R18
For Adult Only

ここは酒場セブンスヘブン！。

男がいつもこの酒場を訪れることには理由があった。

言っまでもなく、看板娘であるティファが目当てだった。

整った顔立ち長い髪、それに男好きのする体型！。

(いつかモソについてやりたい……)

安酒をあまりながら

立ち働くティファの体を視姦することが

男の日々の楽しみだった。

直接手を出すことはとてもできない。

ティファが美しいだけでなく

格闘にも長けていることは男も知っていた。

だが、ある日——男は偶然、

写真を撮った相手を

撮ることができる

スマホを手に入れた。



何度か実験してスマホの力が

本物であることを確認した男は、

ついにティファにも

魔の手を伸ばす！。

「いらっしやいませ〜!」

ティファアの明るく元気な接客の声が店内に響く。

男は改めてティファアの体を視姦し、ごくりと生唾を飲み込んだ。

もうすぐこの極上の体が入るー!。

そんなたぎった妄想を胸にしながら、

こっそりとスマホでティファアを撮影した。

そして男は最後の実験として、

ティファアが指の力を込められなくなるようにスマホを操作した。

——ガシャン!

「あ……、し、失礼しました!」

ティファアが手に持っていたグラスが床に落ちて割れ、

男はスマホの効力を確信した……。

後日、男はティファを廃墟へと呼び出した。

「こんなところに呼び出して何の用？」

酒場の裏の顔、アバランチについて知られたのではないか――。

そんな疑念を持っていたからこそティファは男の呼び出しを断れなかった。

だが、それは男にとっては関係のない話。

男はただティファの体を好きにできればそれでよかった。

「オレはあなたの体を操作できるんだ」



（うそ……！ 力が入らない！）

男の言葉が事実であることはテイファアにもすぐに理解できた。
体に全く力が入らず、自由に動かすことができない。

「くぅ……！」

どれだけ力をこめても結果は変わらなかった。

全身が痺れてしまったように弛緩し、

中途半端な姿勢のまま

なんとか立っているのが精一杯だった。

…!!

グッ

「クク……これでご自慢の格闘もできないな」

「どういふつもりなの!?!」

「あんたとしてみたいことがあってね……」

「例えばこういうのはどうだ？」

男はスマホを操り、モニター越しにティファの体を指でつついた。

「!? な、なに、これ……！」

「オレがあんたの体をさわってやってるんだよ」

「く、あ………う……、ああ……！」

男はスマホをいじり、好き放題にティファの体をつつく。

んんん……

びんびん……

「やめなさい。こんな……！ あ、く……！」

「手も足もでない相手の体を

好きにするのはすいぶんと気分がいいものだな」

「はあ、はあ、あ……あ、んん……！」

スマホ越しに触って感じるじわじわ。

やがてティファの声に甘いものが混じり始める。

「クク……あんだ、まさか感じてるのか？」

「ぞ、そんなわけないでしょ！？ 早くこんなマネはやめなさい！ さもないと——」

「さもないとどうなるんだらうなあ？」

「くだらないゴタクはやめてもらおうか」

男はスマホを操作し、ティファの胸の感度を上げた。

ぶんぶん

「あ、ん……！ な、なに……！？ 胸があつい……！」

「口答えされるのは嫌いでね。立場をわからせるためにあんだの胸の感度をあげたんだよ」

「な……、そんなことまで……！」

「胸だけでイかせてやる」

ぶんぶん

ティファアの体を動けないように固定したまま、男はその豊かな胸に手を伸ばした。

「はあ、あああ……、くぅ……！」

ズンズン

男が無造作に胸を揉んでいるだけで

ティファアの体には電流のような快樂が走る。

「や、やめなさい……ん！ あ、はあ、あああ……！」

「あんだこそ無駄な抵抗をやめたらどうだ？」

「従順になつてくれればオレもひどいことはしないさ」

「誰があなたなんか……！」

「じゃあ仕方ないな。胸だけしてみつともなくイけ」

「……？ あ、はあ、ん……ああ、あ……！」

モシ
モシ

男はしばらくの間、容赦なくティファアの胸を揉み続けた。ティファアの反応を見ながらスマホで更に胸の感度を上げ、強制的に絶頂させる。

「うあ、はあ、いや……はあ、こんな……、ん、

ああ、ああああ……！」

男の思惑通り、ティファアは胸だけでイカされてしまう。

モシ
モシ



強制的な絶頂の余韻で

ぐったりとしているティファを連れ、

男は自宅へと戻った。

この日のために用意しておいた拘束台の上に

ティファの体を横たえて抵抗できないように固定する。

ティファが気がついたときにはもう、

物理的にも動けなくされてしまっていた。

「**離しなさい、この卑怯者……!!**」

「**ラン……まだ口答えをする気か**」

だがまだ抵抗する気力は失っていないティファに、

男の嗜虐心が疼いた。

やっ……

ハハハ
どうなの……?

男は新たに取り出した器具で
テイファアの胸を刺激する。

「あ、く……！」

そんなもの近づけないで……！」

「また胸だけでイカされたいようだからな。
楽しませてやろうっ！」

「ふあ、ああ、ん……！」

あああ……！」

テイファアが全くできないことをいいことに、

男は器具の先端でテイファアの体をねぶるように刺激した。

ペンにも似たその器具は軽く振動し、
繊細な刺激をテイファアに与えていく。

「う……、はあ、あ、うう……！」

「どうだ？ そろそろ慣れて良くなってきたか」

「そんなわけではないでしょ……！」

強気に言うテイファアだったがその頬が上気しているのは明らかだった。

「今度は直接当ててやろう」

男はティファのタンクトップをまくりあげ、豊かな胸を露出させた。

「これが夢にまで見たティファの巨乳か。」

形も色も綺麗でオレの理想にぴったりだ」

男は自分勝手なことを口走りながら

ペン型の器具で再びティファの胸を刺激する。

「あ……………く、ああ……………」

「おっと、そういえば胸の感度を上げたままだったな。」

まあ一生そのままでも困らないだろう」

「な、何を言ってる……く、あ……………人の体をもてあそぶなんて……………」

男のいいように扱われ、ティファの目が怒りに燃える。だが体を感じてしまうことは止められなかった。



「そろそろ乳首にもパイプ味わわせてやるか」

「!? ああ、ああ、ああああ……!」

今までは胸の周囲への刺激ばかりだっただけに、

乳首に振動を当てられる感覚は強烈だった。

「やめなさい……! あ、それ、止めて……」

く、ああ、ああああ……!」

全身がびくびくと跳ねてしまうのを

止めることができないまま、

ティファは男の前でみづともなく悶えてしまふ。

「いい調子だな。このまままたイかせてやる」

「いや! いやあ……! ふあ、ああ、ん……、ああ……!」

「我慢しても無駄だ」

男はねつとりとした手つきでティファの乳首を刺激し続ける。

く……ああ、ああああ……!」

ティファはまた絶頂を迎えさせられてしまった。



ティファは激しい絶頂からやつと正気に戻ったとき、気がつけば複数の男に囲まれていた。

「これからオレたち全員であんたの体をいたぶってやるよ」

男が雇った数人の助手も同じ形のパイプを手に持ち、ティファの肌に撫で付ける。

「いや、やめ……！ ああ……！」

「毎日これが続ければ全身で感じるようになるかもしれない？」

楽しげに笑いながら男たちはパイプでティファの全身をくまなく刺激していく。

「はあ、う、はあ、ん……！ あああ、はあ、あう……！」

いくら我慢しようとしても無駄だった。

何度か絶頂を迎えさせられたティファの体は、もう全身で感じてしまうようになっていた。



男たちによって股を開かされる。

「離して……! やめ……く、ああ……!」

そして男の二人がティファアの股間にバイブをあてがった。

「んあ、ああ、あああああ!」

すでに十分に高ぶっていたティファアは、

クリトリスに与えられた刺激に

あられもない声をあげてしまう。

「クク……まだイかないよな? これくらい我慢できるよな!」

「……っ、はあ、く……!」

男の挑発と強制的に与えられる快感に何とか耐えるティファアだったが――!

「そっぴこなくちやなあ……!」

その抵抗する強い意志はかえって男を喜ばせるだけだった。

「機械でイかせてもつまらんからな。ここはやはりオレの手でイかせてやるよ!」



男は無遠慮にティファアの股間に指を伸ばした。

「!? あ、う、あ——あああああ!」

「オレの指を簡単に飲み込んだな。体は欲しがってるみたいだぜ」

「やめ——あ、はあ、ああああ……!」

男の指がティファアの膣内にすっぽりと埋まっている。

「いい締め付けた」

「く……うう……!」

自分の体内に異物が挿入されているおぞましい感覚。

びくびくびく

びくびく

だが——その感覚はティファアに圧倒的な快楽ももたらした。

男はティファアの膣内で指を軽く曲げ、壁をこすりあげる。

「ああ、あああ? だめ、そんな、ああ……! しないで……!」

男がニヤニヤと笑いながら指を軽く動かし続けると——!

「くッ……! あ、あああ、ああああああ……!」

ティファアはついに膣内への刺激で達してしまった。

「さて、そろそろ本番といくか」

「……」

男はティファにあられもないポーズをとらせ、ペニスを露出させた。

「いや……、それだけは……！」

なんとか抵抗しようとするティファだが、

何度もイカされた肉体はもう限界だった。

脚を開じることすらできず、男がペニスの先端を

あてがってくるのをただ見ているだけになってしまう。

ギョッ

ギョッ

ヤッ……

「ずっとモノにしたかった女を

ついに犯せると思うとたまらないな……！」

「あ、ああああ……！」

ぬる♡

ついに男のペニスがティファアの膣内に入っていく。

「だめ……、あ、う……あああ……っ」

またイッたばかりで敏感な膣壁の感触に男は酔い痴れる。

「ついにあのティファアに……クク……」

欲望が満たされるのを感じつつ男はゆっくりと腰を振り始めた。

「はあ、ああ、あ……」

ティファアの体温と、鍛えた肉体ゆえの締めりの良さを堪能する。

男はすぐに我慢できなくなって激しいピストンを開始した。

ズ
ズ



「あつ、はあ、ああ、んあ！
ああ！く、ん……！」

テイファアの嬌声が室内に鳴り響く。
(こんなヤツに犯されてるのに……！)

何もできないまま感じてしまう無力感が
テイファアを襲う。

(また……またイカされる……っ)
テイファアがどれだけ耐えようとしても、
快楽だけは止まってくれない。

「あ、ああ、ん——
あああああああああ……！」

十分すぎるほど濡れた膣内は
男の身勝手な欲望にも反応し、

再び絶頂させられてしまっていた。
「く……うう、はあ、はあ、はあ……っ」

息をなんとか整えて耐えようとする
テイファアに男が言う。

「気持ちいいんだろ？」
「……っ」

「気持ちいいと言え。オレに犯されて
ヨガってることを認めろよ」

テイファアは男のセリフには答えず、
睨み返した。

心は屈していないことを示すのが
テイファアの精三杯の抵抗だった。

「ラン……認めれば楽になるのにな」

男は多少気分を書しながらもニヤニヤと笑みを浮かべ、パイプを再び手にする。

「こうやって犯されながらパイプも使われたら……どうなるかな？」

「……！」

男がなぶるようにピストンしながらパイプをクリトリスにあてがう。

「く……ああ、はっ、ああ……！」

「いい反応だな。さあ、認めろよ。」

気持ちよくなってるってな」

男は笑い、腰をグライントさせて

テイファの膣壁を荒らしていく。

だが、テイファは嬌声を上げはするが、

決して男を認めるようなことは言わなかった。

「それでも気持ちイイのを認めないのかい？」

「こんなのツ！全然……ツ！んんん！」

「仕方ない……。じゃあ罰として中に出してやる」

中に出されてしまう——女としての本能的な恐怖が胸に迫るが、

それでもテイファは男の思う通りに振る舞うことはなかった。

「はあ、あ……く、うう、あああ……！」

「そら、いくぞ……！」

「あ、う、ああああああ……！」

連続する絶頂を味わわされながら、子宮に男の白濁を叩き込まれる……。

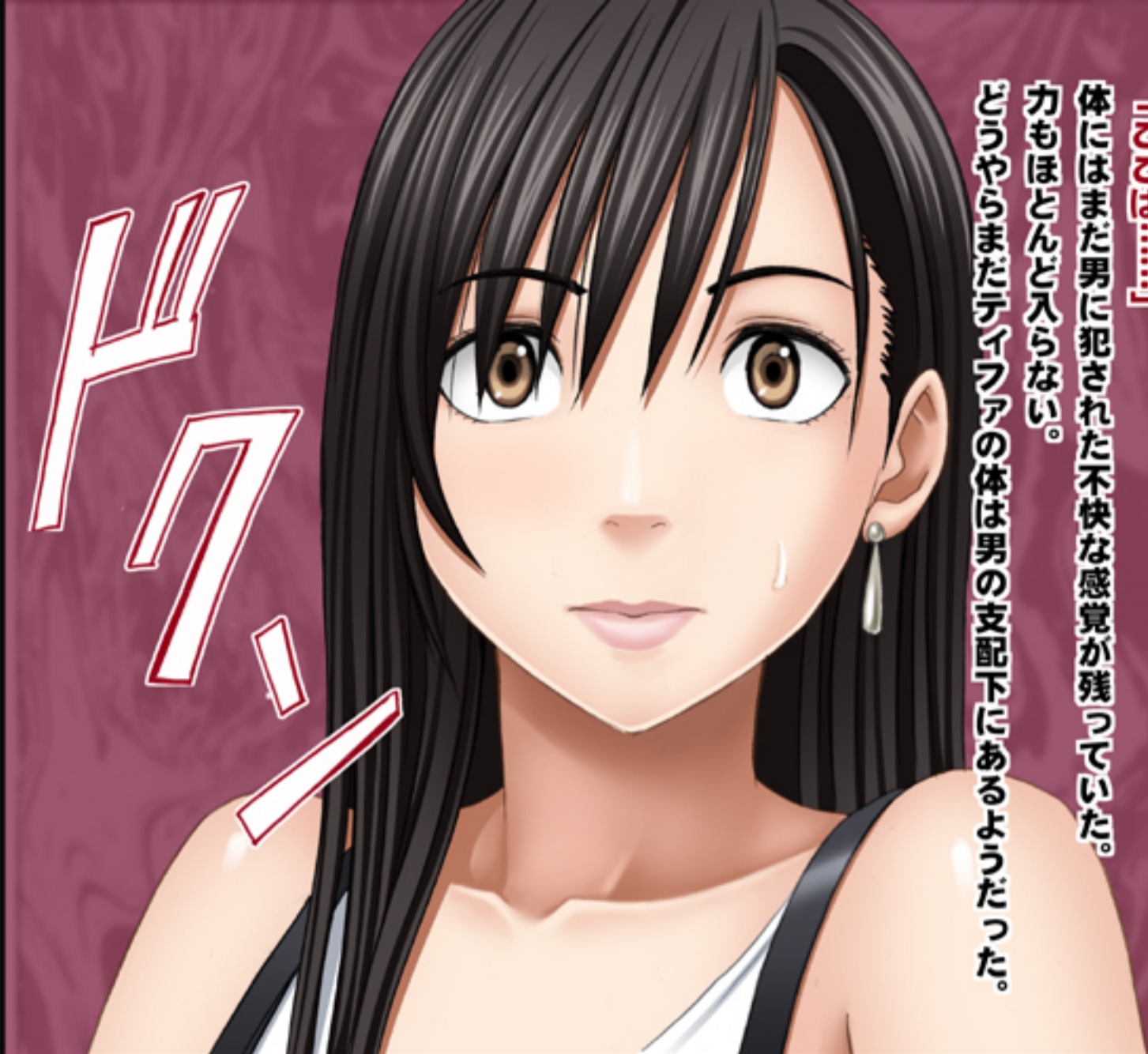


気が付くと、ティファは別の場所に連れてこられていた。

「ここは……」

体にはまだ男に犯された不快な感覚が残っていた。
力もほとんど入らない。

どうやらまだティファの体は男の支配下にあるようだった。



だが……！

「え……？」

突然、目の前にクラウドの姿が現れる。
「く、クラウド……？」





「助けにきてくれたの!?!」

クラウドは優しいな笑みを浮かべている。

そして無言のまま歩み寄り、

ティファアの体を抱きしめた。

「あ……。ど、ごめんあさい。

今、体を操られてて……。力が入らないの」

「……」

「せつかく助けにきてくれたのに、

これじゃ足手まとい——」

ティファアが言いかけたとき、

クラウドの手がティファアの胸をもみじいだいた。

「ん……。な、何!?! クラウド——」

ティファアが違和感を抱いた瞬間、

クラウドはティファアの背中にまわりその体を拘束した。

「違う……! これはクラウドじゃない! これはニセモノ!」

やっと確信を得たティファだったが、もう遅かった。

偽のクラウドはティファの体を羽交い締めにし、胸をもみしだきながら股間にも手を伸ばしてくる。

「やめ……、離さない、このニセモノ……!」

強気な口調で言うティファだったが、その抵抗は弱かった。

「こんなことしてる場合じゃないのに……!」

んんん...

んんん...

んんん...

んんん...

手を払いのけようと思っても、どうしても本気で抵抗することができない。

「クラウドの姿でされると感じちゃう……!」

「く、クラウド……! あ、ん、ああああ……!」

偽物だとわかっていても、声を聞いた瞬間にまたニ瞬勘違いしてしまう。

ティファは偽のクラウドの指によって簡単にイカされた。



（だめ……！ これは偽物……！ 偽物なのよ！）
どれだけクラウドにそっくりに見えてもそれは幻だ。
頭ではわかっていてもやはり本気で抵抗することができなかった。

（抵抗して……こんな幻からは目覚めなきゃいけないのに……っ）
心はどうしてもクラウドの聲に反応してしまっ
気力を弱めてしまっ。

「あ、だめ……そこは……！」
偽のクラウドはそれをいごとと
ティアファの下着をすらし、
いきなりペニスをスリットにあてがった。

くちゅ

「だめ……やめて、だめ……っ」
そのまじわってもティアファはまじも抵抗できず
むじろらららららかでは言をでしてしまっていた。

「あーあーあああああー！」

ティファの反応が弱いのをいいことに、

偽クラウドはバツクから一気にティファの膣内に挿入した。

（入っできてる……。また犯されてる……。）

悔やむティファだったがもう遅い。

ズンズンズン

ズンズンズン



そして挿入されると同時にティファにかかっていた幻覚が解けた。

「……ッ！」

偽のクラウドの姿が、みるみるうちにスマホ男のものになる。

「どうだ？ 気持ちよかつただろうか？」

「く……ああ、ああ……」

「もう言い訳できないだろうか？」

「ひどい……、つ、はあ、あああ……」

クラウドの姿を利用された怒りよりも、幻にすがつてしまった自分の弱さがティファにはシヨツクだった。

ドキッ

心は乱れ、男に抵抗する気力も急速に消えていく。

「クク……いい具合になってきたな」

「つ、ああ……、はあ、う……ああ……」

!?

意志の力を失ったティファはもう男の思うがままだった。
「いや、あ……はあ、やめて……」
男にがっちりと押さえつけられながら犯され、
体を動かすこともできない。

「クク……クラウド相手にたっぷり濡れた分、
オレが使わせてもらおう」

「クラウドが来るわけがないのに……、わたしは……っ」
幻にすがってしまったことで、

ティファはクラウドを裏切ってしまったような気分だった。
自分に失望し、押し寄せる快楽に流されていく……

ガッ

ガッ

ガッ

「あああ、はあ、あー！、ああああ！」
「ほら、イケよ。クラウドに謝りながら、
オレに中出しされてイケ」

「いや……ああ、く、うう……っ」
道理の通らない男のセリフだが、
今のティファには効果絶大だった。
膣奥を集中的に突かれ、急速に体が高ぶっていく……！

「あ……ごめん……ごめん、クラウド……っ」
「そっつた……！ ククク……！ オレも出すぞー！」
「ふあ、ああ、あああ……」
いく、イク……はあ、イク、イク……！」
男のペニスがティファの膣内の「番奥で膨らむ」
イクッ……！ あ、ああああああ……！」
ピュプ、ドピュ、ピュルル……！
熱い精液がティファの子宮内で迸り、
粘って大量に張り付く。

あああああ

「く……うう、はあ、はあ
……ああ……。クラウド……」
ティファの心も体も
男の精液を受け入れてしまっていた……！

イクッ

テイファは体を操られ続け、男に弄ばれるままになっていた。

「あ……イク、また……イク……！」

「そつだ……。だいぶ素直になつたな」

テイファの胸の感度は上げられたままな上に、

何度も犯されるうちに体のほうが快楽を求めるようになっていた。

今は乳首をひねられただけで簡単に絶頂する。

男に都合の良い人形のような状態だった。

「ほら、これだけで……またイクんだろ？」

「あ……あああ、うう……あああああ……！」

「ハハハ、いい締め付けた！」

男に犯され、腰を振らされる。

飽きられてしまうまで、テイファは男に支配されたまま、ただ快楽に流されてしまうだけの日々を送るしかなかった。



コスプレイヤー桃色れくさんの
【桃色れく強制操作 -ティファ編 -】写真集
【桃色れく強制操作 -ティファ編 -】ROM
もよろしくおねがいします。
今回のこの本と同じシチュエーションの
美しいティファの写真が満載です!

クリムゾン×桃色れく
コラボ特設サイトはこちら
<http://momoreku.net/tifa/>

強制操作 ティファ編

2016年 8月13日発行

発行 クリムゾン
印刷 大陽出版

<http://www.alles.or.jp/~uir>
twitter @crimson_3

強く気高いティファが意のままに操られる！



女の体を自由に操ることができる
スマホを持った男に狙われたティファは
力を封じられ、怪しい実験室でカラダを開発され、
幻覚を見せられてココロも犯される…！

